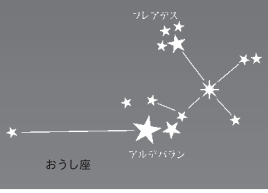

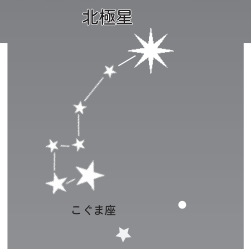

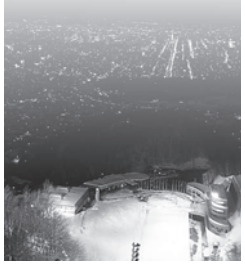

マイブーム

羊蹄医師会 会長　河合（かわい）　貴之（たかゆき）

最近の私のマイブームはアクアリウムです。ある時、育成熱が突然湧きはじめ、ネットできれいな水槽に引き込まれ、水のゆらぎや魚たちが思い思いに泳ぐ姿を眺めていると、不思議と気持ちが落ち着きます。診療や会議で慌ただしく過ごした一日の終わりでも、水槽を見つめていると頭の中が少しずつ整理され、心がリセットされていくような気がします。「１／ｆゆらぎ」の効果なのか、それとも単なる現実逃避なのかは不明です。

アクアリウムの魅力は、水槽の中に「自分だけの世界」を作り出せることです。流木や石、水草を配置し、小さな自然をデザインしていく時間は、童心に返ったような楽しさがあります。しかも、水槽の中は単なる箱庭ではありません。水草は光を受けて酸素をつくり、魚はその酸素で呼吸します。魚の排泄物は微生物によって分解され、水草の栄養となって再び成長します。小さな水槽の中に、一つの生態系が見事に成り立っています。医学とは分野が違っても、生き物同士が互いに支え合いながらバランスを保っている姿は、生命の営みの不思議を感じます。育成する魚の選択も重要です。海水魚は色鮮やかで憧れますが、水質管理や設備を考えると、ずぼらな私には到底務まりそうにありません。迷うことなく淡水魚を選びました。もっとも、「手がかからない」と思っていた淡水魚も、水換えやコケ取り、フィルター掃除など、予想以上に私を働かせてくれます。

どうやら「ずぼらでもできる趣味」という私の診断は、少々甘かったようです。次は魚を増やそうか、それとも水草を植え替えようか…気がつけば、休日の楽しみは熱帯魚ショップ巡りになりました。診療では患者さんの健康を守る毎日ですが、自宅では小さな生態系の「主治医」として、魚たちに長生きしてもらえるよう奮闘しています。

“巨人・大鵬・玉子焼き”

上川北部医師会 会長　和泉（いずみ）　裕一（ゆういち）

最近肩の可動域が狭くなってきたことを自覚している。後方へ回すのが辛くなってきた。しばらく運動からは遠ざかり、メタボが気になる最近の自分には当然のことかもしれない。本来はここで一念発起して身体を動かすために何か始めようとなるべきだが、根が怠け者の私は、歳だからまあ仕方ないかと自分を納得させようとしている。年齢とともに怠け者が加速している。

思えば昔は野球少年で、毎朝５時から少年野球、放課後は日没まで部活の野球練習に明け暮れる日々だった。怠け者の自分にもそんな時代があったと懐かしんでいたら、“巨人・大鵬・玉子焼き”というフレーズが蘇った。昭和の高度経済成長期1960～1970年代の懐かしき流行語で、当時の世相を反映していた。まず１つ目の“巨人”は、プロ野球チーム読売ジャイアンツのことであるが、現役時代「打撃の神様」と言われた川上哲治監督のもと、長嶋茂雄・王貞治をはじめとした名選手を揃える読売巨人軍が、破竹の日本シリーズ９連覇（Ｖ９：1965～1973年）を成し遂げ世の中が沸いた。この時代に日本ハムファイターズは北海道になく、巨人ファンが圧倒的に多くを占めていたと思う。２つ目の“大鵬”は柏戸とともに柏鵬時代として大相撲の黄金時代を支えた第48代横綱、昭和の大力士である。手堅く安定した相撲で45連勝した大鵬ファンは多かった。３つ目の“玉子焼き”は多くの子どもたちの好物で、鶏卵は高度成長期の「物価の優等生」と呼ばれ弁当のおかずの必需品であった。今も私にとっては酒のお供の一つでもある。

さて今はというと、国民を沸かせこのような語呂の良い流行語に匹敵するものはなさそうに思うが、これは情報量が多く興味が分散しているのか、熱狂するものが少ないのか、ない頭をどう捻っても「ショーヘイ」以外は思い浮かばない。